

<研究報告>

接触の度合いと外国人に対する態度

小池浩子 信州大学教育学部言語教育講座

酒井英樹 信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：接触仮説, 外国人に対する態度, FUMIE テスト

1. はじめに

本研究の主な目的は、外国人への態度を様々な指標を用いて測定することによって、測定方法による研究結果の違いを検証することにある。外国人との接触の度合いが外国人に対する態度に影響を及ぼすかをいくつかの異なる測定方法で測定することで、接触仮説 (contact hypothesis; Allport, 1954) に関する先行研究の結果の混在 (e.g., Stephan, 1985; Pettigrew, 2008) の要因を検証することにもつながると考えられる。接触仮説によれば、対象集団との接触が、対象集団に対する態度変化 (偏見) に影響を及ぼすことが予測される。しかしながら、先行研究によっては対象集団との接触が態度変容をもたらさないケースも報告されており、接触の効果に関して肯定的な結果と否定的な結果が混在していることは否めない。本研究は、このような結果の混在が測定方法に起因するという可能性を考察するものである。

社会心理学における態度に関する二重過程モデル (dual-process models of attitudes) に基づくと、明示的に測定される態度 (explicitly measured attitudes) と潜在的に測定される態度 (implicitly measured attitudes) に無関連性 (dissociation) が観察されることがあると指摘されている。そこで、本研究では、外国人に対する態度の測定指標として、明示性において異なる測定方法を用い、これらの測定指標と接触の度合いとの関係を調査した。その結果に基づいて、接触仮説に関する肯定的な結果を示す研究と、否定的な結果を示す研究の混在について考察した。

2. 研究の背景**2.1 集団間態度と接触仮説**

態度とは、個人、集団、物事に対しての判定的反応であり、非常に肯定的な場合から非常に否定的な場合までである。また、態度は周囲の影響で学習され形成される (Davidson & Thomson, 1980)。自分とは異なる集団に対する何らかの態度が集団間態度 (intergroup attitudes) である。ある集団に対して何らかの態度を形成すると、それは行動となって表出され、相手を含む周囲に伝達される。このように、対人関係、国際関係などにおいて、相手に対する態度が関係性に影響する。

一般に人は内集団に対する最良性を保有するという。たとえランダムに分けられたとしても、「あなたたちは同じ性質を持つ」と信じさせられるとその内集団を最良するようになる (Tajfel & Turner, 1979)。そして 3 歳ぐらいからこの傾向を示すという (Cameron, Alvarez, Ruble, & Fuligni, 2001)。これは、自分を健常者とみなす人が障害者に対して保有する態度にも当てはまると考えられる。実際、保育園の 4 歳の健常児は障害のある子供より障害のない子供を友人としてより多く挙げるという研究結果が報告されている (Diamond & LeFurgy, 1993)。

集団間の接触が集団間の態度の変容に影響を及ぼすとする接触仮説が提案されている。Allport (1954) が提唱した接触仮説では、4つの条件 (平等性、共通の目的、社会的あるいは権威者の支援、協力関係) を整えて外集団と接触させることによって外集団への偏見が減少するとされた。この仮説を受けて、民族的な外集団に対する偏見を軽減することにつながる接触の条件を検証するために長年数々の研究がなされてきた。Stephan (1985) はこれまでの関連研究をまとめ、他の集団との接触は一般的には肯定的な方向に態度変化をもたらすとしているが、態度変容をもたらさない結果を報告している先行研究が無視できないほどの割合で存在するとも指摘した。Pettigrew (2008) は、516 件の先行研究をメタ分析し、95 % の研究が接触と偏見の間に負の関係を見出しているとまとめた Pettigrew & Tropp の研究に触れ、“intergroup contact typically diminishes intergroup prejudice” (Pettigrew, 2008, p. 188) と予測した。しかしながら、Pettigrew (2008) は、接触が態度変容にもたらす効果にはばらつきがとても大きいことも指摘している (p. 188)。このように結果が混在するため、以下は (1) 接触それ自体が態度の向上に効果があるとする研究群、(2) 一定の条件下での接触に効果があるとする研究群、(3) 効果がないとの結果を得た研究に分けて例示することにする。

まず、集団間の接触、交流はそれ自体が集団間態度の向上に良い結果をもたらすと報告した先行研究をいくつか挙げる。Stephan & Rosenfield (1978) は小学校 5、6 年生のアフリカ系、ヨーロッパ系、メキシコ系アメリカ人について調査し、どのグループの子供もかなり自民族中心主義的ではあったが、他の民族との関わりの少ない状況で育った子供は関わりの多い子供に比べて外集団への否定的態度が強い傾向があることを発見した。教員養成課程の学生を対象に調査した McGeehan (1982) は、多文化教育に関する知識が増えるにつれて学生の自分以外の民族に対する態度、感情が良くなり、事前の民族間交流の量と質が異民族に対する態度に影響すると報告している。Sabar, Yogevev, & Alper (1987) は、アラブ人の子供が民族的に長期間緊張関係にあるユダヤ人に対して抱く民族間の態度について 7 年生を対象に接触の効果を調べた。その結果、直接の接触がさらに交流しようという気持ちを生むと結論付けた。Pederson (1997) は異文化に対する感受性に影響する要素について 7 年生の少年を対象に調査し、文化背景の異なる友人の数が多くほど感受性も高いとの結果を得た。Patterson (1995) は、相手文化の友人、知人を持つこと、社会的交流 (食事、パーティー、デートなど) があることがヨーロッパ系アメリカ人のアフリカ系アメリカ人や

ヒスパニックに対する態度に変化をもたらすことを見出した。ただし、アジア系とアメリカ先住民への態度変化ははっきりしなかった。森川・荒木 (1993) は、愛知県内の外国人児童を受け入れている小学校の4-6年生を対象に、外国籍児童や帰国児童が (a) 同じ学級にいる場合、(b) 他学級に友人がいる場合、(c) 学級にもおらず、他学級にも友人がいない場合の3グループに分けて比較したところ、「外国への憧れ」は他学級に友人がいる場合の方が他学級の友人もなしの場合よりも強く、「外国人への漠然とした不安」は同学級の場合が他学級の友人もなしの場合よりも明らかに小さいことが分かったと報告した。

この一方、全ての集団間接触が一律に良い態度や関係を生むものではなく、一定の条件下での接触のみが効果を上げるという結果を報告している研究も多い。Stephan (1985) は Allport の接触仮説を検証するための心理学系の多くの先行研究を概観し、研究対等性、協力関係、肯定的な結果など少なくとも13に及ぶ条件が整って初めて交流が相手集団に対する肯定的態度につながると主張している。Stephan の概観には例えば以下のような研究が含まれる。学校においてグループで授業内容を生徒が分担して互いに教えあうジグソー・クラスルームという手法を用いた研究がある。つまり Allport (1954) の挙げた条件のうち、共通の目標と協力を設定した実験授業である。Geffner が行った実験では、このジグソー・クラスルームによって白人とメキシコ系アメリカ人の民族間の好意が相互の向上を見せたという。他に鉄道管理ゲームで意思決定を協働で行う設定を用いた一連の研究がある。例えば、Cook が行った研究では、同等の地位を付与した偏見を持つ白人と黒人の協働で、他チームと競争して勝ったことにすると、統制群に比べ実験群の白人の黒人への偏見が減少したことがわかった。また、Blanchard, Adelman, & Cook が行った研究では、内集団が負ける設定が調べられ、能力の高い黒人に対するほうが能力の低い黒人に対するよりも好感度は高かったという。また、Burnstien & McRaie は、相手に対する好感度は勝った時のほうが負けた時よりも高かったとしている。さらに、Blanchard & Cook の研究では、また自分が援助した人には他人が援助した人よりも民族に関わらず好感を持つ傾向があったことが示された。これらの研究をもとに、Stephan は、実効性の高い交流のためには Allport の条件に加えて、タスクの結果が肯定的であることや人数の平等性、個人的な深い交流であることなど全部で13の条件が満たされる必要があると述べているのである。

条件を付加したり見出した研究のうち、心理実験系以外の、主にフィールドで行った研究を以下に挙げる。向井・金児 (2006) は、一般論としての異文化受容レベルと個人的関心、つながりから来るレベルの区別は重要であると述べている。短期集約的異文化交流プログラムに関して調査した小池 (2005) は、肯定的情動はホームステイや友人関係など親密度の高い付き合いのあった場面で比較的多く表出されたと報告している。また、直接の接触ではないものの、近年日本のテレビで多く放映される韓国製ドラマを視聴することで日本人の韓国に対する態度に変化があったかどうか調査した長谷川 (2007) は、感情移入をもたらす海外ドラマの視聴は対象文化への心理的距離を縮めるが、感情移入を伴わないタイプのドラマでは変化があまりなかったという結果を得た。

専門家が企画した教育プログラムに基づいて計画的に集団間交流を行うことで肯定的な態度変化をもたらすことを示した研究がいくつか挙げられる。例えば Ichilov & Even-Dar (1984) は、イスラエルにおける調査で、ある構造化された交流プログラムに参加することで民族間のステレオタイプが減少したことを報告している。Brown & Carbonari (1977) の研究では、アメリカ合衆国での民族的に孤立傾向にあるいくつかの民族の子供たちがいかに教育的介入によって偏見などの態度を変化させるかを調べた。この場合の教育的介入とは世界の様々な文化に触れることであった。その結果、どの民族の子供たちの態度にも統制群と比較して明らかに大きな変化が見られたという。加賀美 (2006) は、教育の効果について調べるために日本人学生と留学生に授業の一環でシミュレーションゲームと協働の準備によるプレゼンテーションを行わせたところ、異文化間態度で何が大切と考えるかに変化を見出した。介入の事後には事前と比べて、異文化間コミュニケーション能力で重視される項目の多く（創造性、共感性、協働性、複眼性、多様性尊重、相手文化尊重、状況判断、寛容性など）を重要とする人が増加した。また、留学の効果に関する研究も見られる。Thomlison (1991) は、イギリスに留学したアメリカの大学生を対象に、知識やオープンマインドなどと並んで、異文化に対する態度にも大きな変化が見られたことを報告している。また、Hansel (1986) の AFS (American Field Service, 高校生の交換留学を主な活動とする民間国際教育交流団体) で海外留学する生徒たちに関する調査でも異文化間知識、センチティビティー、地球問題への意識の高まりや対人関係における成長が見られた。

接触が効果をもたらさなかったという結果を報告した研究として、心理学系の多くの先行研究をレビューした前掲の Stephan (1985) は以下のものを挙げている。Gonzales は、上述のジグソー・クラスルームの手法を用い、白人とメキシコ系アメリカ人の比率を調整して研究したが、白人のメキシコ系への態度は向上したものの、メキシコ系の白人に対する態度は変化しなかったという。また、Weigel, Wisner, & Cook の研究では、学校で民族の異なる生徒が協働でレポートを作成するという設定を用いたところ、白人のメキシコ系への好意は向上したが、メキシコ系と黒人の白人への好意度は向上しなかったことが示された。また、その仲間以外の一般的民族態度変化にはつながらなかったという。このようにマイノリティー側のマジョリティーに対する偏見はなかなか変化しないという報告がある。

以上の先行研究をまとめると、接触の外集団への態度変化への効果について、先行研究の結果は混在しているといえる。

2.2 態度に関する二重過程モデル

社会心理学では近年、明示的態度測定と潜在的態度測定とを区別している。それは、二重課程モデルに基づく。二重課程モデルの一つである *associative-propositional evaluation (APE) model* (Gawronski & Bodenhausen, 2006) によると、態度には自動的、感情的な反応として現れる場合 (*associative processes*) と論理的、演繹的に整理し、状況や社会的な適切性を考慮した上で現れる場合 (*propositional processes*) があるという。自動的・感情的反応として現れる態度は暗示的に測定される態度 (*implicitly measured attitudes*) であり、演繹的に

現れる態度は明示的に測定される態度 (explicitly measured attitudes) である。そしてこの2者に無関連が観察されることが報告されている。

2.3 研究課題

態度変化に関する研究では、その研究方法が様々である。フィールド調査の場合、観察であったり、質問紙であったりする。心理系の実験研究では態度を測定する尺度を用いることが多い。この研究手法の違いが結果のばらつきを生むことは容易に考えられる。また、実証的研究であっても、自己報告に基づく明示的な測定方法を用いており、潜在的な測定指標を用いていない。接触の効果について、先行研究の結果が混在しているのは、先行研究が二重過程モデルを考慮してこなかったからである可能性を検討する必要がある。

そこで、本研究において、(a) 接触の度合いは、外国人に対する態度と関係があるか、(b) 接触の度合いと外国人に対する態度との関係は、測定方法によって異なるか、という研究課題を設定した。

3. 方法

3.1 参加者

国立大学の1年生対象の授業において、授業の一環として質問紙調査およびテストを実施した。匿名性が確保されることと、質問紙調査およびテストの結果は講義内容の一部として用いることを受講生に伝えた。さらに、研究目的で得られたデータを使用する可能性を伝え、受講生にデータ使用の許可を示してもらった。

質問紙調査およびテストは2回の授業にわたって実施された。両方の授業の出席者82名のうち、欠損値を含む回答者およびデータ使用未許可の回答者を除いた結果、68名となった。さらに、外れ値の回答を示した3名を除いた結果、65名の回答を本研究の分析対象とした。

3.2 測定具

(1) 接触の度合い

接触の度合いに関する項目を4つ設けた。まず、「外国人と接する機会の程度は?」という質問項目に対して、5件法(1 ない, 2 ほとんどない, 3 比較的少ない, 4 比較的多い, 5 かなり多い)で回答を求めた。さらに、(a) 外国人の知り合いの人数, (b) 外国人の友達の数, (c) 外国人の親しい友達の人数を記入してもらった。

4つの指標から合成得点を計算するために、それぞれの回答を標準化(z 値に変換)した後、主成分分析を実施した。第一主成分への負荷量は、接する機会が.656、外国人の知り合いの人数が.820、外国人の友達の数.865、外国人の親しい友達の数.701であり、固有値の説明率は全体の58.559%であった。この第一主成分の得点を、「接触の度合い」指標として分析に用いた。

(2) 外国人に対する態度

外国人に対する態度指標として、質問2項目、接近回避尺度得点、イメージの肯定性指

標, FUMIE テストによる潜在連想得点 (Implicit Association Score, IAS) の4種類 (5指標) を用いた。Antonak & Livner (2000) は, 態度の測定について, 測定されていることを参加者が自覚することができ, さらに, それにしたがって回答を変えることができる直接的測定と, 測定されていることを参加者が自覚できないか, あるいは自覚したとしても, それに従って回答を変えることが難しい間接的測定に分類している。Gawronski & Bodenhausen (2007) によれば, 前者は明示的な測定, 後者は潜在的な測定と呼ばれる。この分類に従えば, 質問2項目, 接近回避尺度得点, イメージの肯定性指標は, 自己報告 (self-report) に基づく態度の測定指標であり, 直接的または明示的な測定であると考えられる。一方, FUMIE テストによる潜在連想得点は, 測定されていることを参加者が自覚するかもしれないが, それによって回答を変えることは難しいため, 間接的または潜在的な測定と考えられる。

外国人に対する態度を最も明示的に測定する指標として, 質問項目を2項目作成した。まず, 「外国人にどの程度親近感を持っていますか。」(親近感) という質問項目に対して, 6件法 (1 まったく感じない, 2 感じない, 3 あまり感じない, 4 やや感じる, 5 感じる, 6 非常に強く感じる) で回答を求めた。次に, 「外国人に対して偏見がありますか。」(偏見) という質問項目に対して, 6件法 (1 非常にあると思う, 2 あると思う, 3 ややあると思う, 4 あまりないと思う, 5 ないと思う, 6 まったくないと思う) で回答を求めた。

接近回避尺度として, Yashima, Zenuk-Nishide, & Shimizu (2004) の7項目を用いた。留学生という用語をすべて「外国人」に変えて実施した (表1参照)。6件法 (1 まったくそう思わない, 2 そう思わない, 3 あまりそう思わない, 4 ややそう思う, 5 そう思う, 6 かなりそう思う) で回答を求めた。クロンバック α は, .832 であった。比較的高い内的一貫性を示したため, 7項目の平均値を計算し, 接近回避尺度得点として用いた。

イメージの肯定性指標に関しては, 「『外国人』に対するイメージを思い浮かぶ順に書いてください。」と, イメージをあまり深く考え込まずに, 思ったままに書くように指示した。書かれたイメージを, 本研究者2人がそれぞれ, 肯定的なイメージ, 中立的なイメージ, 否定的なイメージにコード化した。書かれたイメージの総数は213であり, 1人あたりの平均個数は 3.277 ($SD=2.080$, $Min=1$, $Max=12$) であった。本研究者2人の評定者間信頼性 (intercoder reliability) は 99.061% (213個中211が一致) であった。不一致が見られた2個については, 中立的なイメージを最終判断とした。その結果, 肯定的なイメージの数は77, 中立的なイメージの数は80, 否定的なイメージの数は56であった。各参加者について, 肯定的なイメージの数から否定的なイメージの数を引いた値を, イメージの肯定性指標として用いた。

表1. 接近回避尺度 (Yashima, Zenuk-Nishide, & Shimizu, 2004 に基づく)

No	項目
1	日本で勉強している外国人と友だちになりたい。
2*	できれば外国人と話すことを避けるようにしている。
3	もし学校にいるのなら、外国人に話しかけてみたい。
4	アパートの部屋を外国人とルームシェアしてもかまわない。
5	地域に住んでいる外国人を助けるためのボランティア活動に参加したい。
6*	隣の部屋や家に外国人が引っ越してきたら、やや不快に感じるかもしれない。
7	レストランや駅でコミュニケーションに困っている外国人がいたら助けるだろう。

注.* は反転項目。

最も潜在的に測定される態度指標として、集団式潜在的連想テストである Filtering Unconscious Matching of Implicit Emotions (FUMIE) テスト (Mori, Uchida, & Imada, 2008) の改良版を用いた。「良いこと」を表す単語と「悪いこと」を表す単語を○×印で峻別する作業をさせた。その中に態度を測る対象となる概念の用語が3分の1程度挿入された単語の列(1列に60単語)が、12列用意された。本研究における対象語は「外国人」であった。対象語の語数に合わせて、評価語も3語から成る単語が選ばれた。1列目は練習用の試行で対象語は挿入されていない。2列目は対象語に○を(課題A)、3列目は対象語に×を付けるように指示した(課題R)。各回20秒で、課題AとRを交互に5回ずつ繰り返した。4列目から11列目までの作業量を基に、課題Aの作業量の平均から課題Rの作業量の平均を引いた値を求めた。この値を、潜在連想得点として分析に用いた。

3.3 分析方法

接触の度合いが、外国人に対する態度と相関があるかどうかを検討するために、相関係数を計算した。まず、各指標の基本統計量を検討し、分布の正規性を検討した。潜在連想得点以外の指標が正規分布から逸脱していたため、正規分布の前提を必要としないノンパラメトリックのスピアマンの順位相関係数を計算した。Green & Salkind (2005) によれば、相関係数の解釈の基準として、.10 (小さい相関係数)、.30 (中程度の相関係数)、.50 (大きい相関係数) という数値が示されている (p. 256)。

4. 結果

表2は、接触の度合いと、外国人に対する態度指標の記述統計量を示している。歪度と尖度の点からは、接触の度合いが5%水準で正規分布から逸脱していた。さらに、正規性の検定によれば、5%水準で正規分布から逸脱していたのは、接触の度合い、親近感、偏見、接近回避尺度得点、イメージの肯定性指標であった。

表2. 接触の度合いと態度指標の記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
接触の度合い	0.000	1.000	1.768	2.493
親近感	3.631	1.024	-0.185	0.061
偏見	3.446	1.031	0.149	0.360
接近回避尺度得点	3.870	0.894	0.412	0.562
イメージの肯定性指標	0.323	1.678	-0.409	1.140
潜在連想得点	3.042	2.915	0.273	-0.339

注. $N=65$. 歪度の標準誤差 = 0.297; 尖度の標準誤差 = 0.586.

接触の度合いと外国人に対する態度との関係を検証するために、相関係数を計算した。正規性の点から逸脱があったため、ノンパラメトリックのスピアマンの順位検定を行った。組み合わせ数が 15 であったため、第一種の過誤を避けるため、Holm's Sequential Bonferroni 法 (Green & Salkind, 2005, p. 418) により有意水準を調整した。表 3 は、接触の度合いと外国人に対する態度指標の相関行列を示している。接触の度合いとの関係に注目すると、接触の度合いと、有意な相関係数を示した態度指標は、親近感 ($r_s = .376, p = .002$) と潜在連想得点 ($r_s = .350, p = .004$) であった。接触の度合いと接近回避尺度得点の相関係数は、 $r_s = .333$ であり、Green & Salkind (2005) の基準値に従えば、中程度の相関と認められるが、統計的に有意ではなかった ($p = .007$)。一方、偏見 ($r_s = .228, p = .067$) とイメージの肯定性指標 ($r_s = .107, p = .395$) と、接触の度合いとの相関係数が小さかった。

表3. 接触の度合いと外国人に対する態度の相関行列 (スピアマンの順位相関と有意確率)

	1	2	3	4	5	6
1. 接触の度合い		<u>.376</u>	.228	.333	.107	<u>.350</u>
2. 親近感	<u>.002</u>		.200	<u>.477</u>	.121	.030
3. 偏見	.067	.110		<u>.379</u>	.299	.132
4. 接近回避尺度得点	.007	<u>.000</u>	<u>.002</u>		.138	.092
5. イメージの肯定性指標	.395	.336	.016	.273		.185
6. 潜在連想得点	<u>.004</u>	.812	.296	.467	.141	

注. $N=65$. 相関係数は対角線より右上に、有意確率は左下に示されている。下線は、Holm's Sequential Bonferroni 法による α 水準の調整により、有意を示した値である。

5. 考察

第一の研究課題に関して、本研究の結果は、接触の度合いは、外国人に対する態度と関係があることを示唆している。特に、親近感と潜在連想指標において、接触の度合いとの相関が見られた。一方、偏見とイメージの肯定性指標においては、接触との度合いとの相

関は小さかった。

第二の研究課題に関して、本研究の結果は、接触の度合いと外国人に対する態度との関係は、測定方法によって異なることを示している。別の言い方をすると、明示的に測定される態度であっても、親近感、偏見、接近回避尺度得点、イメージの肯定性指標の間で、接触の度合いとの関係が異なっていた。また、潜在的に測定される潜在連想得点と接触の度合いとの関係は、明示的に測定される態度である親近感と接触の度合いとの関係と同様に、有意な相関を示した。この点に関して、もう少し詳細に考察する。

接触の度合いとの相関が低く、統計的に有意でなかった指標は、偏見とイメージの肯定性指標であった。一方、接触との度合いとの相関が比較的高かった指標は、親近感と接近回避尺度指標であった。前者（偏見とイメージの肯定性指標）は、参加者に否定的な態度を自己報告することを求めているのに対して、後者（親近感と、接近回避尺度得点の5つの項目）は、参加者に肯定的な態度を自己報告することを求めている。測定指標が直接的であり、明示的である場合、態度のどの側面を自己報告させるかが、接触の度合いとの関係に違いをもたらすことが示唆される。

接触と集団間態度に関する研究のほとんどは明示的な態度測定の方法を用いている。先行研究の結果に偏差が大きいのは社会的・状況的に左右されやすい明示的測定方法を用いているためだと考えられる。また、本研究の結果は、接触仮説を検証するためには、明示的に測定される態度だけでなく、潜在的に測定される態度にも注目する必要があることを示唆している。社会心理学において、態度に関する二重過程モデルによれば、明示的に測定される態度と潜在的に測定される態度に無関連性が観察されることがあるとされている。接触の度合いが、態度変化にもたらす影響について検証する際に、測定される態度の明示性を十分検討する必要があると提案できよう。

6. おわりに

本研究を通して、人の態度、特に他の民族集団に対する態度を調査する場合、用いる指標によって異なる結果が得られることが確認された。特に明示的に測定される態度と潜在的に測定される態度の間に明らかな違いがみられることが民族間の態度（本研究では、「外国人」に対する態度）に関する調査でも明らかになった（様々な態度に関する測定指標間の関係についての考察は、Sakai & Koike, 2009 を参照されたい）。このことから、今後、態度の研究に当たっては明示と潜在両方の指標を用いるべきであること、できるだけ複数の角度から調査すべきであることが提言できる。

本研究の限界点としては、まず、接触仮説に基づく研究は民族偏見を持っている人を主な対象とし、その偏見の軽減に資する変数の特定をめざしているが、本研究の対象者は外国人への偏見が必ずしもあるとは限らない一般的日本人であるという点が挙げられる。このことから接触仮説関連の先行研究と本研究の直接の比較ができにくいところがある。直接の比較をするために、将来的には民族的偏見を保持する対象者を特定し、それらの対象

者が与えられた刺激によっていかに偏見を減ずる方向に態度変容を経験するのかを測定する研究の中で明示的および潜在的態度測定指標の両方を用いて比較することが必要であろう。第2に、「外国人」という一般的な集団に対する態度を調査したが、人は個々の民族集団に対して異なる態度を保有することは明白であり、それぞれに対する調査もまた必要であろう。さらに、本研究では偏見と親近感に関する測定の方法が1項目のみの単純なものであった。将来的には多数の項目からなる尺度を用いて調査する必要がある。第3に、本研究では相関係数による統計分析を行ったが、参加者数を増やし、多変量解析（確証的因子分析など）の実施により、接触の度合い、明示的に測定される態度指標、潜在的に測定される態度指標などの要因の関係を詳細に検討することが必要とされる。

人の態度を知ろうとするためには複数の視点が必要であると、本調査によって改めて示された。明示的に測定される態度と潜在的に測定される態度の両面を視野に入れ、今後の研究を進めることが大切である。同時に現代の社会では肯定的な民族間の態度をもたらす方法を見極めることが求められている。正確な態度測定の方法をもって現実を見極め、その態度が向上する方法もまた見極めていくことが肝要であろう。

謝辞

FUMIE テストの使用および改良について、守一雄先生（東京農工大学大学院）に許可を得た。感謝申し上げます。

引用文献

- Allport, W. G. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- Antonak, R., & Livneh, H. (2000). Measurement of attitudes towards persons with disabilities. *Disability and Rehabilitation*, 22, 211-224.
- Brown, R., & Carbonari, J. (1977). *Evaluation of a multi-cultural project designed to reduce group isolation*. (ERIC Document Reproduction Service No. ED150202)
- Cameron, J., Alvarez, J., Ruble, D., & Fuligni, A. (2001). Children's lay theories about ingroups and outgroups. *Personality and Social Psychology Review*, 5, 118-128.
- Davidson, A., & Thomson, E. (1980). Cross-cultural studies of attitudes and beliefs. In H. Triandis & R. Brislin (Eds.), *Handbook of cross-cultural psychology, 5: Social Psychology* (pp. 25-71). Boston: Allyn and Bacon.
- Diamond, K., & LeFurgy, W. (1993). Attitudes of preschool children toward their peers with disabilities: A year-long investigation in integrated classrooms. *Journal of Generic Psychology*, 154, 215-221.
- Gawronski, B., & Bodenhausen, G. V. (2006). Associative and propositional processes in evaluation: An integrative review of implicit and explicit attitude change. *Psychological Bulletin*, 132, 692-731.

- Gawronski, B., & Bodenhausen, G. V. (2007). Unraveling the processes underlying evaluation: Attitudes from the perspective of the APE model. *Social Cognition, 25*, 687-717.
- Green, S. B., & Salkind, N. J. (2005). *Using SPSS for Windows and Macintosh: Analyzing and understanding data (4th ed.)*. Upper Saddle River, NJ: Pearson Education Inc.
- Hansel, B. (1986). The AFS impact study: Final Report. *AFS Research Report 33*. (ERIC Document Reproduction Service No. ED285795)
- 長谷川典子. (2007). 「韓国製テレビドラマ視聴による態度変容の研究」『異文化間教育』 27, 58-73.
- Ichilov, O., & Even-Dar, S. (1984). Interethnic contacts in an alternative educational environment: The Israeli Shelef project. *Journal of Youth and Adolescence, 13*, 145-161.
- 加賀美常美代. (2006). 「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか」『異文化間教育』 24, 76-91.
- 小池浩子. (2005). 「短期異文化接触における異文化のとらえ方と事前研修の受講者評価」『異文化コミュニケーション』 8, 123-137.
- McGeehan, J. (1982, March). *The relationship of selected antecedent variables to outcomes of training in multicultural education for pre-service teachers*. Paper presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association, NY. (ERIC Document Reproduction Service No. ED214923)
- Mori, K., Uchida, A., & Imada, R. (2008). A paper-format group performance test for measuring the implicit association of target concepts. *Behavior Research Methods, 40*, 546-555.
- 森川智之・荒木紀幸. (1993). 「小学生の異文化に対する態度」『日本教育心理学会総会発表論文集』 35, 439.
- 向井有理子・金児暁嗣. (2006). 「異文化受容態度の構造」『大阪市立大学 人文研究』 57, 63-77.
- Patterson, B. T. (1995, August). *Racial attitude development and inter-ethnic experiences of white university students*. Paper presented at 103rd annual convention of American Psychological association, NY. (ERIC Document Reproduction Service No. ED394093)
- Pederson, P. V. (1997, November). *Intercultural sensitivity and the early adolescent*. Paper presented at 77th annual conference of the National Council for the Social Studies, Cincinnati, OH. (ERIC Document Reproduction Service No. ED422225)
- Pettigrew, T. F. (2008). Future directions for intergroup contact theory and research.

International Journal of Intercultural Relations, 32, 187-199.

- Sabar, N., Yogev, A., & Alper, Y. (1987, April). *The effect of direct contact with Jews on attitudes of Israeli Arab youth and its implications on designing a new curriculum*. Paper presented at a round table session of the American Educational Research Association, Washington, D.C.. (ERIC Document Reproduction Service No. ED289759)
- Sakai, H., & Koike, H. (2009). *Implicitly and explicitly measured attitudes towards foreigners: A dual-process model perspective*. Unpublished manuscript.
- Stephan, W. (1985). Intergroup relations. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.), *Handbook of social psychology: Vol.2. Special fields and applications* (3rd. ed.) (pp. 599-569). New York: Random House.
- Stephan, W. G., & Rosenfield, D. (1978). Effects of desegregation on race relations and self-esteem. *Journal of Educational Psychology*, 70, 670-679.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*. (pp. 33-47). Monterey, California: Brooks/Cole.
- Thomlison, T. D. (1991, February). *Effects of a study-Abroad program on university students: toward a predictive theory of intercultural contact*. Paper presented at 8th annual Intercultural and Communication Conference, Miami, FL. (ERIC Document Reproduction Service No. ED332629)
- Yashima, T., Zenuk-Nishide, L., & Shimizu, K. (2004). The influence of attitudes and affect on willingness to communicate and second language communication. *Language Learning*, 54, 119-152.

(2009年9月9日 受付)

(2009年12月17日 受理)